

民話・死んだふりしたキツネ



: 宮城の民話

民話・死んだふりしたキツネ



ある日、キツネが山道で大(オオ)っきな、鱒、見っけんだど
そすて(そして)くわえて帰(け)っぺとしたら人の足音すっから
とつても大っきくて 持(た)がれないから鱒の背中だけ嚙って
死(す)んだふりして街道(きやんど)脇さあ寝転がって後で旅人が通りすぎ
てがら、持って帰っぺと考えだど！

旅人がキツネ見っけで、「ありやキツネ死(す)んでる、側さあ魚落ちでるがら
魚の毒にあたったんだべ」ってキツネの考えたように見過ごして行ったんだ
と——。ところが！

ほんでも(それでも)旅人は「待てよ！なんにもキツネの肉食うわけでねえ！
ほんだ(そうだ)キツネの皮は高く売れっぞ！あのキツネ持って帰っぺ」と戻
って横になつたキツネのしっぽ掴んで背中さあ担(たが)いだんだど
ビックリしてキツネしょんべんが出て旅人の背中ビショビショしたつけ
「なんだなんだ臭(くせあ)ごど」って手離れたつんど——！
キツネわらわら(懸命)と逃げたんだど

こんでよんつもんこさげた